開催地名：兵庫県姫路市	
開催日時	令和４年８月 29 日（月）　13：30　～ 15：00
開催場所	姫路市防災センター
語り部	山崎　義勝　　（岩手県釜石市）
参加者	姫路市職員　37 名
開催経緯	姫路市は、天候に恵まれた瀬戸内地方に位置し、甚大な災害に対する自治体職員の危機感が薄れている可能性がある。一方で、山崎断層地震や南海トラフ地震に対する職員の危機管理意識の向上のため、初期対応にあたる職員の研修が必要である。そこで今回、東日本大震災の語り部より、緊急消防援助隊を受援する際の具体的な対処方法や、若年層職員等に対する災害伝承について、お話を伺うこととする。
内容	（１）はじめに 岩手県釜石市は製鉄業で発展し、ラグビーの強豪、新日鐵住金釜石を擁する、鉄と魚とラグビーの町である。最盛期の人口は９万人を超えたが、製鉄業の衰退と東日本大震災の影響で、現在の人口は約 32,000 人となっている。 東日本大震災では、リアス式海岸に押し寄せた津波によって、888 人の尊い命が奪われ、関連死を含めると死者数は約 1,000 人に達し、152 人が行方不明となった。家屋倒壊は 3,656 棟を数えた。震災当時、釜石大槌地区消防本部消防長だった私は、震災発生当時消防庁舎の３階にいた。震度５弱の揺れは経験があったが、震度６弱は初めての経験だった。とても歩けるような状況ではなく、建物が倒壊するのではないかという恐怖を覚えた。地震直後は被害状況の情報が全く入ってこなかったため、静まり返っていたことを覚えている。通信は使えなくなっていたので携帯無線機を使用したが、そこから聞こえてくる言葉は「全滅」もしくは「何もなくなってしまった」というような信じられないものが続いた。 （２）大津波警報発令 釜石市をはじめとする三陸沿岸地域では、政府の地震調査委員会によると、この 30 年以内に宮城沖で地震が発生する確率は 99 パーセントと非常に高くなっており、それにともなう津波が発生する確率も当然高いものと考えられていた。釜石市には、ギネスブックにも登録された世界最大水深（63m）の湾口防波堤が 31 年の歳月をかけて 2009 年３月に完成していた。明治三陸地震津波規模の大津波に対して、湾内の防潮堤の天端高（おおむね４m）より低い水位に減水させることで市街地への浸水被害の拡大を防ぐ機能が期待された。 しかしながら、東日本大震災では、設計外力を超える大津波の威力により、防波堤は大きく損壊し、津波は湾内の防潮堤を越え、ハザードマップで想定してい

	た浸水域を大きく越えて被害が広がった。地震発生の約 30 分後に襲われたこの津波により、一瞬にして約 1,000 人の命が奪われた。防波堤は一定の減災効果を発揮したことが認められたが、想定以上の津波だったことが伺える。 　被災状況は、地域によって異なった。孤立した漁村集落もあり、無線機による安否確認を継続して行った。翌日、緊急消防援助隊の受け入れ準備が開始され、自衛隊による被害状況調査活動と救出活動、物資配給活動が開始されるとともに、海上保安庁による洋上捜索も大規模に展開された。 （３）東日本大震災を受けて 　災害に備えるにあたっては、市街のみならず、自分が勤務している庁舎がどのような環境にあるのか、どのような構造なのかを意識して把握しておく必要がある。被害を受けた消防署の壁をみたとき、津波の高さを実感した。以前は通信指令室は消防車両の近くにあり、基本的には一階部分に設置していた。しかし、復興による改築、復旧を行う際には、建物の高い位置に設置するように変化した。これは、震災時に通信指令室にいた２名の方が殉職されたことによる。 　消防団の安全確保に関しては、活動時間を制限する『15 分ルール』というものを設定した。地震発生から津波が到達するまでの時間から計算し、15 分は消防活動を行い、それ以降は自分の命を守るために避難をするというものである。しかし、緊急時に時間を確認しながら実際に 15 分で切り上げられるのかという疑問は残る。市民の命だけでなく自分の命も、同じように守るべきものだと意識することが重要だと考える。
開催地より	豊富な映像を使って、震災時における取組や教訓について、実体験をベースにとても分かりやすくお話しいただいた。参加者はそれぞれ興味深く聞くことができた。とても意義のある講演だったと思う。平常時からの防災に対する心構えが大切であるため、今後もこのような経験者による講演会開催などにより、行政職職員の研修に力を入れていきたい。